

ニ ッ ポ ン 万 歳

伏見区 原田 敬子

アテネオリンピックが終わって早や3箇月。その時ばかりは、スポーツ音痴の私も足を高く上げて棒高跳びをし、にっこり笑ってシンク口のポーズを決めて、一本背負いを決めてガッツポーズをするかと思えば、解説者になり、やたらうんちくを傾け、また応援団長と忙しいことであった。オリンピックは平和の祭典であるし、共通の話題で一家団らんのささやかな幸せをしみじみと感じさせてくれる「良き物」なのである。

しかし誰もが思うように、各国の代表となり選手として競技するのは、どれほど大変な事か。電車に乗れば空いた席を探すような凡人ではいけない。つま先立ちで乗物に乗り、いや乗物に乗らず歩き、いやいや走り、自分の身体を鍛え抜いて代表となり、心技体を磨いて名誉をかけて競うのである。それほどの選手たちにも悩みはあろう。一つには持って生まれた体質である。同じように鍛えても、全てが同じように強くなるわけではない。体質、気質は各人様々で、力があれば敏しょう性に欠けるとか、ダイナミックであるがリズム感がないとか、勘は良いが気が小さいとかいう具合である。

何とか自分の長所を生かしながら欠点を補いたい。これは当たり前のことである。しかし、しかしである。人は神ではない。全知全能には決してなれないのである。と分かっちゃいるけどあきらめられない。ここでドーピングする人が出てくる。室伏選手はハンマー投げで自分の力のみで金メダルを勝ち取った。一位の人がドーピングで作られた借り物の身体で記録した距離にわずか28cmまで、本物の身体で迫ったのである。

日本から誰一人ドーピング選手が出なかったことは本当に素晴らしいことである。わが国では元来、記録を良くするためというより、「うっかりドーピング」者が出ていた。風邪薬はいけならしいが、漢方薬ならいいんだろうとか、便秘の漢方薬なら良いのだろうとか、これくらいのサプリならとか。素人のだろう判断ではドーピング陽性になり、出場停止処分を受け人格まで否定され、選手生命の盛りを無為に過ごすことになる。あの時の悲しそうな選手の顔は見るに耐えられない。しかし、ドーピングは all or nothing, 薬物が少しでも検出されれば陽性である。近年わが国ではスポーツ医学も、ドーピングに対する教育もなされ、「うっかりドーピング」を防ぐため、使用できる薬のリストや仕組みなど、ずいぶん親切に教えて頂けるようになった。

さて、小、中、高の子ども達はどうだろう。国民体育大会でもドーピング検査が取り入れられている。子ども達の指導者は薬に対して素人であるということを知りべきである。自分が使って良かったドリンクやサプリを安易に勧め、子ども達はそれを魔法の薬のように服してはいないか。子どもは大人の小型ではない。発育途中人なのである。生命ある物を頂き、食品の素材全てを頂き、内なる宇宙と言える各自の身体で各人各様の肉体、免疫機能、そして精神（大脳皮質）を構築しているのである。

人は神ではない。子ども達に各人の身体で競うことの素晴らしさを伝え、その長い生涯でスポーツを楽しめるよう御指導願いたい。